



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	書評：篠田節子著,「仮想儀礼 上・下」,新潮社,二〇〇八年十二月二〇日刊 / 藤田庄市著,「宗教事件の内側：精神を呪縛される人々」,岩波書店,二〇〇八年一〇月三〇日刊
Author(s)	櫻井, 義秀
Citation	宗教研究, 83(3), 1047-1056
Issue Date	2009-12-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/47951
Rights	日本宗教学会 本文データは学協会の許諾に基づきCiNiiから複製したものである
Type	journal article
File Information	shukyokenkyu_kasogirei.pdf



書評と紹介

篠田節子著

『仮想儀礼』 上・下

新潮社 二〇〇八年二月二〇日刊 四六判変型
上巻四六九頁・下巻四四五頁 各一八〇〇円＋税

藤田庄市著

『宗教事件の内側——精神を呪縛される人々——』

岩波書店 二〇〇八年一〇月三〇日刊
四六判 vi＋三四〇＋二七頁 二八〇〇円＋税

櫻井義秀

一 はじめに

『私たちのジハード』で一九九七年に直木賞を受賞され、数々のヒット作をとばしている篠田節子は日本宗教学会員ではない。評者は書評の依頼を受けた際、学会員以外の著作が書評対象本となることを知らなかったが、編集委員会が『仮想儀礼』を是非取り上げたいとのことだった。篠田の大作は新聞・雑誌の書評等でも絶賛されている。現代の宗教にいささかでも関心のある読者家にとっては気になる本だ。今後、この本は宗教を信じない一般市民の宗教観形成に少なからぬ役割を果たすだろう。

藤田庄市は、フォトジャーナリストとして山岳修験や拝み屋さん、そしてカルト宗教のルポを手がけてきた論壇誌でも著名な日本宗教学会員である。『宗教事件の内側』は、藤田が総合雑誌等に発表してきたカルト・リポートの総決算とでもいえるべき重厚な著作だ。

これまで学術書の書評しかしたことがない私に「小説」「ルポルタージュ」の書評ができるだろうか。両著を読了して二ヶ月以上経つのに書評の構成も思いつかない。締め切り目を目前にして大変な仕事を引き受けてしまったとの感を深めた。おそらくは、カルト問題の調査研究をやっている評者であれば、なにがしかのことを書くのではないかという依頼だったのだろう。著者達が小説とルポルタージュという方法によってどこまで「カルト」の実像に迫っているのか、それは宗教研究という技法及びその知見の蓄積とどのように響きあえるのか。宗教を研究している人間であれば、この二著に限らず、一度は考えてよい問題である。実際に、宗教現象や教団形成、宗教と社会の葛藤などは、学者の研究以上に小説やルポルタージュによって社会に報告され、問題への思索が深められてきたのだから。

とはいえ、学術研究との距離は確かにある。小説が仮構された時空間において人間や社会のリアルさを描き、ルポルタージュが著者の直感的把握と足で稼いだ資料に基づきながら、リアルな事柄を構築する。一般読者は、それらのリアルさに感動する。それに対して、学術書は研究者の創造性や感性によってリアルな質感を描くよりは、「事実」を明らかにする方法や視点、集積した資料やその分析を重視する。往々にして一般の生活者

や他分野の人間には些末に見える事柄にこだわる。もちろん、同じ研究領域や学問を共にしておれば、細部に宿るリアルさや仮説構築のリアルさに感銘を受けるのだが、分かりやすくはない。

この書評ではテキストとしての小説やルポルタージュが書評者にどう読めたのかということもさることながら、「読者に受ける」ということを重く見たい。というのも、小説やルポルタージュは出版業界に評価されなければ形にならないし、読者に読まれてなんぼの世界で洗練度を高めている。その意味で小説やルポルタージュの評価は、一般読者にどのように受け入れられ、人間や社会にまつわる種々の事柄についてのイメージや観念を形成していったのかという過程を含める必要がある。この点で、この書評は学術書の書評のように「問題」と「分析」を対照させて、順に成功・不成功ないしは評者の想定を超えた創造性を賞めて済ますという簡単なものにはならない。実際に、そもそも両著が「問題—分析」の形式になっていないのだから学術書評の形式が通用しない。それが評者の悩みである。

さて、言い訳めいた前口上はこのくらいにして、書評の段取りを説明しよう。以下では両著が「カルト教団の形成と破綻」「宗教的暴力の創生と封印」についてどのように叙述したのかに着目しながら簡単に内容を紹介した後、筆者から論点を提示する。そして、公刊された書評やインターネット上に見られる一般読者の評価などを交えながら、両著の読まれ方について特徴をまとめ、最後に、宗教について物語ること、宗教を読むことの意味を現代の社会空間に位置づけてみようと思う。

書評と紹介

二 内容紹介

『仮想儀礼』上・下

本書は『小説新潮』二〇〇四年四月号に第一回が掲載され、二〇〇七年五月号の三八回目まで連載した長編小説である。上巻では「聖泉真法会」という名の教団が脱サラした二人の男によって金儲けのために作られ、パトロンの恵まれて教団の体裁をなしていく。

歴史的な教団形成であれば、民俗宗教か創唱宗教の別を問わず、宗教伝統とカリスマ的な教祖、及び組織形成を取り仕切る世俗的知恵に長けた人がいるものだ。ところが、この教団は、都庁職員とフリー編集者という全くの素人が、ゲームソフト脚本「グゲ王国の秘宝」を唯一の教説として、ネット上にスピリチュアル・カウンセリング紛いのサイトを立ち上げ、来客接遇の事務所を開設したところ、自称トラウマを抱えた若者や献金強要に嫌気がさして教団を辞めた中年主婦等が集まり、あるうことか食品加工会社社長が工場敷地内に真法会館を寄進してくれた。

いささか都合主義的な展開という気がしないでもないのは、信者やパトロンが勝手に集まり、それぞれの信仰をいつの間にか持つようになったという筋書きだ。教団立ち上げ・成功の過程として間違っていないが、宗教ビジネスはニッチ市場というよりも成熟した市場であり、大手から中小まで同業他社がひしめき合っている。ここで一旗揚げるには、教祖の人間的迫力に加えて他宗教と比べて競争力のある「教説」「儀礼」「信者コミュニティ／ネットワーク構築のノウハウ」「布教方法・

教化プログラム」といったものの開発が必要だ。主人公がこんなことで宗教団体ができて良いのかと驚くのも無理はない。

しかし、安易な成功は簡単な転落にもつながるもので、真法会館にふさわしい仏像群を買い入れたブローカーに盗品と偽慈善活動を持ちかけられたことで、最終的に脱税、スキャンダラスな疑惑ということで国税庁や週刊誌に追われることになった。課せられた追徴金を払おうにもパトロンが事業に失敗し、破産、立ち退きを迫られる。そこで、篤信の女性信者達と出直すことになる。彼女達は古い師として夜の街で働き、それがまた週刊誌ネタとなつて、信者達との共同生活はさしずめイエスの方舟と化す。家族の了承を得ないで共同生活に入つた女性信者の家族が反カルト運動を組織したり、世話した元メンバーが内部告発本を書いたりしたことで、淫祠邪教のレッテルを貼られていく。坂を転がるごとく転落の一途を辿るが、スキャンダラスな教団を批判する側もいれば、真実を明らかにしようと身体を張るライターも出てくる。実にめまぐるしい展開が続ぎ、暴行事件・信者監禁容疑で警察に取り調べられている最中に、主人公は女性信者達と放浪の旅に出る。

下巻は、上巻よりも面白い。教団がカルト視される過程につきものの「詐欺・脱税」「教祖の不品行」「信者への洗脳疑惑」が手際よく描かれている。本書の真骨頂は、教団のスキャンダルが宗教ブローカーとの不注意な付き合いにより事件に巻き込まれ、信者の家族・政治家の介入など偶発の要素で発生し、それがメディアにより増幅されるなかで教団のカルト性が創発するというストーリーにある。世間から淫祠邪教として遇される

教団において信者の意識が変性意識状態に移行するほど追い込まれる。逃避行によってさらに信仰共同体の関係性が緊密になる過程もよく考え抜かれている。

読者にスリリングな期待と衝撃を与えたのは、変性意識状態において男性教祖と女性信者の親密性が性の儀礼に突如転換する場面、及びそういう精神状態において情動が暴力に変化する想定である。主人公は全くスピリチュアルな人間ではなく、稼ぎとしての教祖役を非常識にならない範囲で演じていたに過ぎない。ところが、本気になってしまった信者と反対者達の板挟みのなかで苦悶し、詐欺師であることを白状してゲームから降りようとした瞬間、女性達は性の儀式によって逃れようがない親密性の空間に主人公を閉じこめてしまった。彼等は墜ちるところまで墜ちることによって最後に運命を共にした宗教団体となった。

卓抜した場面設定だが、宗教事件の幾つかの要素が複合的に用いられているためにほとんど事例としてありえない想定となつていふことには注意したい。このような男性教祖と女性信者の心理的な関係は、小規模教団としてありえないことではない。しかし、性的親密性を特定信者に与えることで信頼や忠誠を引き出すやり方は、男性教祖主導の例が大半である。また、暴力行為が変性意識状態とまでいかなくとも特殊な心理状態において発生するのは確かだが、信者の暴力への忌避感や倫理的規制を外す教説や司令なしに、信者が自発的に殺人を犯すような事態が発生しないことは確認しておいた方が良好だろう。

宗教のスキャンダラスな事件や宗教的過激主義のテロなどを

メディアで目にする現代では、宗教と暴力、宗教と異常な精神状態がセットでイメージされることが多い。直接的な結びつきはなく、媒介的な要因が幾つも想定されるのだが、そこをとばしてしまいがちだ。

このような媒介的な要因を個別の宗教事件に即して独自の考察を加えたのが藤田庄市の著作である。ここから藤田の本に移ろう。

『宗教事件の内側——精神を呪縛される人々——』

藤田は、一九八〇年代後半から現在までの日本における宗教事件を追いながら、カルト的宗教経験の諸相を丹念に描き出す。

「第1章 予兆——八〇年代後半宗教事件・考」では、日本カルトの揺籃期に相当する様々な宗教事件が挙げられている。

「エホバの証人輸血拒否」「真理の友教会殉死」「悪魔祓い殺人」「死体蘇生ミイラ事件」の中で、エホバの証人を除けば自死や他殺に至るほどの宗教的信念の強さは窺われない。むしろ、信者間で牽制しあったり、グループ内の心理的圧力が異常に高まったりした結果、不可解な死体損壊や遺体放置が生じた。

「第2章 遺体と暮らす」奇妙な事件群には驚かされる。一九九五年の福島県須賀川市の女性祈禱師と顧客集団が繰り広げた六名の殴打殺人、遺体放置に始まり、一九九七年のライフスピースによるミイラ事件、二〇〇〇年の加江田塾子供ミイラ事件、札幌ミイラ信仰家族事件、超能力師幼児遺体損壊事件、大

書評と紹介

阪五人餓死事件、二〇〇一年の復活希望ミイラ事件、二〇〇二年の福岡ミイラ事件、二〇〇七年の大牟田五遺体事件と続く。霊能者や祈禱師、或いは自己啓発セミナーを主催したグル達は、特異な教説や「定説」により生体と死体の境界を引き直してみせた。問題は、自分が次の犠牲者になる可能性があったにもかかわらず、弟子・信奉者達がなぜ死体カルトに留まり続けたかである。藤田は、ここから靈感・霊視商法やオウム真理教に連なる「精神呪縛のシステム」を見ていくことになる。濃密な信仰共同体に自生した自縛の論理が、カルトの教祖や幹部によって商売や殺人稼業のシステムに転換されていく。

「第3章 祈りの値段」に登場する「法の華三法行」は、修行システムを確立した一九八六年から二〇〇〇年までに約八七〇億円、霊視商法の「明覚寺」は一九八七年から一九九六年までに約六〇〇億円を集めたとされる。どちらも宗教を騙る詐欺事件として最高裁においてトップに実刑判決が下ったが、宗教的言説を信じて信者が自ら献金したのだから詐欺に当たらないと強弁した。どちらも宗教法人であり、明覚寺は休眠宗教法人を買い、法の華三法行の場合は宗教法人格取得に清水雅人が便宜を図ったとされる。その他、ゴーストライター達が福永法源の著作を書いた。宗教ビジネスが悪徳商法に成長した例である。

「第4章 違法伝道の果て」に登場する統一教会に対しても、一九八七年から現在まで一千億円を超える被害金額が報告されている。一九五四年に文鮮明に創始され、一九五九年から日本宣教を開始したこの新宗教は、一九八〇年代から姓名判断・家

系図診断を用いて一般市民に運勢転換、先祖霊の供養・解怨の必要性を説き、その手段として印鑑、高麗大理石壺、多宝塔等を高額で販売した。また、統一教会の名前を掲げては信者を集められないので、正体を隠した教養講座やダミー団体に一般市民を勧誘し、セミナーや各種のトレーニングによって信者を教化した後に、統一教会名を明かした。被勧誘者は予め宗教と知って入会する権利、すなわち信教の自由を奪われた伝道行為を違法伝道として告発した。

一九八〇年代末から、一般市民や元信者が統一教会を相手取って損害賠償請求の訴訟を全国で起こし、現在は違法な伝道・献金強要が最高裁で認定されている。にもかかわらず、統一教会の組織的資金調達の方法が詐欺、強迫として刑事罰の対象になつてこなかった。それは、藤田によれば、宗教法人に認められた「宗教活動の自由」が個人の「信教の自由」よりも不当に尊重されたためだ。信教の自由には、本来他者の信教の自由に配慮して自身の宗教を伝えるべしという内在的制約が伴う。このような人権の観念や法秩序を一顧だにしない教団が長年宗教法人で有り続けられたのは、統一教会と政界とのパイプもさることながら、宗教法人の活動を適切に評価することをタブー視してきた日本の宗教行政やマスメディア、宗教界のあり方にも関係がある。統一教会同様、適切な時期に適切な行政や司法の介入があれば、悲劇を防ぐことができた事件にオウム真理教によるサリン事件がある。

「第5章 確信の宗教殺人―オウム真理教」は、藤田が最も力を入れた章である。なぜ有為の若者がオウムに入信し、麻原

への信奉・忠誠を変えずに殺人犯となっていたのか。普通の若者が平常心のまま、時に慈悲心をもって人を殺した精神構造とはいかなるものかと藤田は悩んだ。ここでは、地下鉄サリン事件を含む九つの殺人事件に関与した新実智光と、同じく九つの事件で二〇名の殺害に関与した中川智正の二人に事件の軌跡を語らせる。

新実は麻原同様、阿含宗の超能力の獲得に魅せられ、オカルト雑誌『ムー』に掲載された麻原の空中浮揚の写真を見て入信した。精神世界の愛好家だった。新実は麻原の元でヨーガ技法を修練した後、神秘体験にリアリティを感じ、一九八七年の丹沢セミナーで麻原が語ったポア（悪徳をなすもののカルマを見きって、意識の高い世界に移し替えてやる）を実践するものに変わっていく。新実は法廷においても、終始宗教的確信をもって麻原の指示に従ったと語り、遺族に謝罪を述べず、悔悟の念も見せなかった。

これに対して、中川は医大を卒業後医師になりきれずに出家した。その理由は「巫病」にあったと藤田は考える。中川は自分の意志で統制できない精神状態の救いを麻原のシャクティパットに求め、麻原の霊威の下、入信二ヶ月目に坂本弁護士一家殺害事件に加わった。彼は法廷において自身の精神状態を制御不能なものとして語ったが、裁判官は責任逃れとみなした。藤田は、佐々木雄司の鑑定を参考にしながら、中川は「祈禱性精神病（ないしは解離性障害）」とよぶ精神状態において殺人を犯していった可能性を指摘する。

詐欺的な宗教犯罪の場合は騙りの意図的側面を見ることに無

理はないが、宗教的動機に基づいた殺人や遺体損壊といった事件には、人間の正常な判断力や常識、情動や互酬的感覚を発動させない特殊な精神状態を想定した方が我々は納得できる。これが藤田のいう「宗教事件の内側」にある「精神的呪縛」である。単なる精神疾患として精神病理的診断を下して終わりとせず、信者に素因があるにせよ、呪縛のシステムとそれを動かす人間が具体的にあり、彼等の責任が問われるのではないかと藤田は考えている。では、人の精神や心が囚われる状況をどのようにしたら打開できるのか。これが最後の問いになる。

「第6章 宗教的理想と世俗」で扱われる事例は三つある。地下鉄で父親を殺された娘さんが、修行者として法廷に臨んだ井上嘉浩に投げかけた「理想なんてなくなつて、幸せだったよ」という言葉。それは修行の天才といわれた井上の入信動機や世界観の独善性を打ち砕いた。次に、千日回峰行者小林栄茂と十萬枚大護摩供達成者の筒井叡観の語り。精神と肉体の限界を超え、死の淵を歩きながら行を終える瞬間に、生かされている感覚や言葉にならない喜びを味わったという。最後に、臨済宗妙心僧堂において禅の修行を六年行い故郷に戻った赤松宗典が、住職の傍ら過疎の村で起業し、地域の世話役となったという事例を紹介する。藤田は、世俗の世を道場とする行もあるという禅の行者の言をかみしめる。

結論はこうである。「筒井や赤松の姿勢とそれを確立するに至る宗教体験とそれに基づく世俗についての思考、思想、実践は、精神呪縛の問題とともに、カルトやカルト性を見極めるための強い拠り所となることは確かである。」

書評と紹介

三 カルト宗教への視点

書評対象本の大まかなストーリーを紹介してきたが、小説、ルポルタージュ共に、実際に読んでみなければ、著者達の着想の卓拔さや工夫の凝らされた叙述、文体の味わいは分からない。筆者はそうした読後感を伝えるのにふさわしい文章家ではないし、昔から感想文は苦手としてきたので、ゴツゴツした論点の講評に移らせてもらうことにしよう。

まず、篠田にしても藤田にしても宗教心理の特殊性を前提に宗教の暴力性を叙述していることが両著の大きな共通点だろう。閉鎖的な宗教共同体に巻き込まれた人達の心理状態は、抑圧された意識の解放、感情の披瀝や身体的接触による情動の放出、集団感応状態の持続、意識の乖離や幻覚の発生、等様々に形容できよう。圧力釜に投げ込まれた繊細なところの持ち主達は、ちよつとした圧力バランスの崩れや外界からの刺激によって、お互いに傷つけあつたり、被害妄想を募らせて外部世界を攻撃し始めたりと、病理的な症状を呈する。篠田は聖泉真法会の最期にこの状態を描き、藤田は様々なカルトにこの局面があつたことを指摘している。

また、宗教の暴力性が人間の精神や組織構造の均衡が崩れるところから発生するという点でも、著者達は見解の一致を見ている。篠田は、「宗教は素人には扱いきれないもの」と主人公に言わせているし、藤田は達人的修行をおさめた宗教家でなくては了解しえぬ神秘体験の奥深さを強調している。実に示唆的だ。カルト宗教の第一の特徴は、素人による玄人仕事のまねごと、偶然的な組織の成長と突然の破綻にある。心理療法や精神

医療の知識も経験もない精神世界のマニアや霊能者が、長期間素人カウンセリングや治療に従事できるわけはなく、効能によりクライアントを集めるよりも、素人的教説や儀礼、活動それ自体の信奉者を作り出す実践に精を出すようになる。彼等が考えるところの宗教を始める。

遺体カルトや拝み屋集団の殺人事件などは、そうした営みの初期の段階で関係や組織が破綻したものといえ、信者獲得と金儲けに成功した法の華や統一教会は信奉者を造り出すメカニズムに洗練の度合いを高めていった。藤田はカルト教団が勢力を拡張するこの局面に意識的であり、そのメカニズムに巻き込まれていった一般信者達の心理を報告している。

社会心理学や臨床家が提唱するマインドコントロール論では、悪意を持った他者による外部からの精神操作によって認知の組み替えや精神の均衡が揺さぶられると考えるが、篠田にはこの発想が少ない。主人公は詐欺師であつても常識人であり、教団形成の初期にも末期にも社会的影響力を行使するほどのカリスマ的人物は出てこない。宗教団体の擬装で成功した教団がカルト視される過程で現実のカルトとなつたという設定である。加害者もいなければ被害者もおらず、カルトという組織構造のみが信者のカルト的行為や精神状態を生み出しているのだ。藤田も著作では教祖や指導者による意図的操作というよりもカルトの構造が生み出す精神の呪縛の深刻さに言及する。

次に、カルトから暴力性が自動的に立ち上がるとすれば、それを制御する手だてはあるのかという問題が当然出てくる。篠田の小説には答えがない。というよりも、カルトを通して個人

化・セラピー社会化した世相や、宗教というニッチ市場でサバイバルを試みた男達の悲喜劇を描くことに主眼があるわけで、カルト化を防ぐ制御装置は宗教の側にあるのか、社会の側にあるのかといった問題は想定外だろう。

藤田は、「世俗の尊さ」ということで、宗教に関わらない、特定の信仰を信奉しない人達の精神の自由や日常生活にも敬意を払うことの重要性を論じた。もちろん、非僧非俗と称した親鸞を祖師とする浄土真宗をはじめ、日本の宗教には聖と俗を完全に分離し、位階を設定する教団はほとんどない。しかし、先鋭化した教団は他教団に対する優位性を主張し、オウムや統一教会に至っては、世俗社会に価値を見いださないどころか、自分たちの聖なる場を維持するために社会を破壊し、収奪することをためらわなかった。宗教の独善性を誠める倫理や方策が宗教の側にあるのか、世俗の側にあるのかという議論に藤田は与せず、他者への「寛容」を宗教的態度に自然に組み込んでいる修行者達の紹介に筆を留めている。

藤田の他の著作からこの点を補足すると、他者に対する寛容を宗教文化の次元ではなく、「精神の自由」を尊重することから論を進めるところに藤田の議論の特徴がある。しかも、「精神の自由」は「信教の自由」を包摂する基礎となる概念だという。教団宗教の主張する信教やスピリチュアリズムの個人的靈性とは距離を置いた「精神」を宗教に対峙させる。

カルト問題に関していえば、従来「信教の自由」により守られてきたのは教団側の活動の自由であり、活動の対象となった一般市民の「信教の自由」ではない。卑近な例では、同じ靈感

商法でも、明覚寺や法の華が行えば詐欺罪・恐喝罪になるが、統一教会の場合は民事における不法行為という認定に留まる。不法行為とは、他者の権利侵害をなした加害者に被害者に対する賠償責任を課してしかるべき行為である。しかし、立証責任は被害者の側にあり、加害者はその行為に対する賠償を支払えばそれで済ませられる。だから、統一教会の靈感商法は被害者の提訴、裁判後の和解・賠償とほぼ同時進行で継続され、未だに止むことがない。しかし、詐欺・恐喝という刑事罰であれば、加害者は逮捕され、組織犯罪に対しては組織全体が取り締まりの対象となる。この差は大きい。

統一教会の場合、靈感商法の実行者が宗教的信念に基づいて人を欺していること、実行者自身が金銭的利得を得ないばかりか、『統一原理』の教説と教祖文鮮明の司令に従って収益の大半を韓国に送っていることから、教団本体を詐欺・恐喝のための宗教擬装組織とはみなしにくい。しかし、一般市民にとつて被害は全く同じである。しかも、靈感商法であれば賠償の対象となるが、信者である期間に献金した金は宗教行為とみなされ、特段の心理的圧力をかけられてそれに抵抗したという記録を原告が証明しない限り返還対象にならない。宗教行為は自発的行為とみなされ、信教の自由なのだから外形的に見ていかに不可解であろうと、宗教は司法の介入すべき領域ではないというのが司法判断だった。

宗教事件を裁く法理に宗教的要素が入りにくいことはよく分かる。オウム事件や靈感商法的首謀者を裁くような場合には、「精神の呪縛」の度合いによっては責任能力の問題や刑の軽減

書評と紹介

に関わるという弁護側の主張も出てくるだろう。それは事実的事柄としては正当な主張だが、それでは被害者に対して誰が報いてくれるのかという問題に答えにくくなる。

また、現実の問題として、このような教団の場合、信者自身も被害者である。しかし、元信者が自らを被害者として教団犯罪の責任を問うことに違和感を覚える人もいるだろう。その場合、「自発的信仰」や「信教の自由」の論理から自己決定自己責任と言い切つてよいのかどうか。カルトにおいて加害性と被害性が一体のものとして認識されるためには、「精神の呪縛」の内実を精神科学や社会科学から解きほぐしていく必要がある。

藤田は宗教やカルトの現場から「精神の呪縛」や「スピリチュアル・アビューズ」という概念によつて事柄の本質的把握に努め、事件を具体的に説明することによつて因果関係を明らかにしようとする。このやり方はフォトジャーナリストによるルポルタージュという仕事だろう。それはそれとして尊重したいが、藤田の概念は価値的抽象度が高く、裁判では使いにくいものではないかと思われる。カルト問題の根に「宗教性」があるという指摘も宗教研究者や宗教界にはすぐには受け入れがたいものかもしれない。事件の諸相と概念との間を埋める作業、ないしは「宗教性」の分節化が期待されるが、「それこそ、あんたら学者の仕事だろ」と言い返されるような気もしている。評者は社会科学的概念と論理による事件や問題の抽象化を行ってきたが（編著『カルトとスピリチュアリティー——現代日本における「救い」と「癒し」のゆくえ』ミネルヴァ書房、二〇〇〇

九、拙著『霊と金——スピリチュアル・ビジネスの構造』新潮社、二〇〇九）、まだまだカルト研究の蓄積は薄い。

四 カルト宗教が存在する公共空間

読むことで宗教やカルトを擬似的にでも体験することできるのだろうか。信者は、教典（経典）を読む、朗唱（読経）する、聞く行為や、聖なるシンボルを見て礼拝する、心の中に観る。信者でなくとも宗教書や関連書籍を読む一般市民がいる。精神世界の書棚に置かれた本を読むスピリチュアルな人達もいる。他方で、宗教に批判的な評論を好む読者やカルトのウォッチャーもいる。オウム信者以上に教説や事件史に詳しいオウマーと呼ばれる人達は、資料蒐集や関連書を読破した後、インターネット上に宗教データベースを構築している。インターネットによる情報収集が状態化している若い世代は、間違いなくメディア上で彼等なりの宗教観を構築している。

ネットの世界には高みの見物客だけがいるのではない。オウム真理教（アールフ）をはじめ、インターネット上で勧誘するカルト団体は少なくないし、そこを経由して入信する若者がいる。メディアを通じて宗教やスピリチュアリティーを読んで見て経験した人々が入信するという構図はオウムの時代以来変わっていない。そこでカルト批判の陣営においても、個人・団体を問わずインターネット上に批判的な情報を発信している。インターネット空間はまさしくマスメディアと同様の公共空間となり、カルト論争が展開されている。

残念ながら、宗教者や宗教研究者が『仮想儀礼』や『宗教事

件の内側』をどのように読んだのかを知る手がかりとなるデータは手元にない。少なくとも、インターネット上にまだあまり発信されていない。他方、宗教やカルトを見せ物として観ている人達の宗教観やカルト観は存分に披瀝されている。

藤田の著作に対しては、内容の重さもあってなかなか一般読者がすぐさま感想をブログに書くのは難しいようである。それに対して、篠田の小説は多くのプロガーから支持され、出版元の「圧倒的密度と迫力！現代の黙示録的長編サスペンス」の広告に偽りはないという。SF作家の瀬名秀明も「本書は篠田節子の最高傑作というだけに留まらず、新興宗教を扱うあらゆるエンターテインメントの頂点へと駆け上った。(二〇〇九年二月一五日、朝日新聞書評)」と絶賛する。カルトそのものは仮構だが、登場人物や世相を反映する素材等、構成要素がリアルであるために小説の中にリアルさが立ち上がるという評価である。

リアルさといえば、カルトの教説、救済論、神秘体験、変性意識状態は、当事者達にとって全てリアルだった。彼等の現実感が現実世界ににじみ出し、現実世界を浸食し始めたのがカルト問題である。そのプロセスをルポルタージュという手法でリアルに叙述したのが藤田であるし、小説の中で再構成して見せたのが篠田といえるのかもしれない。

評者が気になるのは、読者のリアルな認識や感覚である。読者のブログには、宗教の怖さが分かったといった類の感想が多く、読者のイメージするアブナイ宗教に近いかそれをはるかに凌ぐおぞましさも兼ね備えた聖泉真法会という捉え方が窺え

た。宗教とスキャンダル、事件が連結されるイメージが増幅される可能性もある。ここで「宗教」への風評被害を気にしても仕方がない。それよりも、ここで得た宗教イメージだけを頼りに実際のカルトに対峙するのは不用意すぎるし、宗教文化の豊かさや社会貢献する宗教の存在も知らずに嫌(宗教)派になる人々が増えることも懸念される。

最後に、宗教研究がメディア情報により構築される公共的な言説空間において今後どのような地位を占めるのか、そのことを心配しておきたい。特定の宗教団体に所属せず、特定の信仰も持たない人が多数派の日本社会において、(作家・ブロガー・カルト)読者)が形成する宗教イメージは、宗教者や宗教研究者が構築しようとする宗教像を凌駕していくように思われる。とすると、この流れに棹さすことはできないにしても、現代宗教の姿を構築する公共空間において、非常に評価の高い二著に宗教研究の立場から書評を加えておくことは学会として必要な作業であり、この書評が掲載される『宗教研究』のネット公開も急がれるところである。